

ローベルト・ムージルの 『グリージャ』について

前田 織 絵

1. はじめに

『グリージャ』(*Grigia* (1921))は、ローベルト・ムージル (Robert Musil 1880-1933) の短編集『三人の女』(*Drei Frauen* (1924))¹⁾に、『ポルトガルの女』(*Die Portugiesin* (1923))、『トンカ』(*Tonka* (1922)) と共に収められた短編小説であり、その二編の冒頭に、アフォリズム風な書き出しを以って収められている。

短編集『三人の女』は、その表題にも拘らず、そのいずれも決してグリージャ、ポルトガルの女、トンカが主人公になっているのではない。寧ろ、主人公として描かれている男に相對位するものとして、相容れない異質性²⁾を備え彼等を導く天の遣い、即ち「天使」のような役割を果たす存在として女性を描き、その女性と、主人公である男性との関わりに焦点を当てた作品であるといえる。

E.Kaiser 及び E.Wilkins によれば、この三人の神話的要素を備えた女性たちは、グリージャは「死の天使」、ポルトガルの女は「美の天使」、トンカは「愛の天使」と名付けられている³⁾。『グリージャ』におけるグリージャが、「死の天使」と名付けられているとおり、この作品における主人公は、絶望的な限界点としての「死」とはまた別の、しかしながら、明らかに「死」へと向かって行く。『グリージャ』においては、最終的な解決もしくは救済というものは「死」によってもたらされ、主人公も新たな高みにおける愛の成就を切望するが故に、現実から自らを乖離させていく。

本稿においては、主人公の現実感覚の消失と、愛の成就もしくは救済とは完全に逆説的である「死」によって物語りに解決を与えようとする方法、即ち「離れた妻との死後の再合一」というテーマと、『合一』(*Vereinigungen* (1911)) 以降のムージルの基本的なテーマである「不実」に焦点をあて、1つの考察を試みる。

2. 背景

ムージルは、第二次大戦における自らのイタリア戦線中の体験から、『三人の女』の中の二つの物語、『グリーンジャ』と『ポルトガルの女』の動機^{モチーフ}と素材を得ている。実際、この二編はその背景の類似性から比較されることの多い作品であるが、それは、特に、二つの小説の舞台となった土地の類似性によるものである。『ポルトガルの女』において「一族は北方から下り、南国の関を前に停止した。」(P-252) という冒頭文に続き、「ブレンナー峠を越えてイタリアに導く大きな道の傍ら、ブリクセンとトリエントの中間の、ほとんど孤立して鉛直に立つ岩壁の上に彼らの城があった。」(P-252) と語られている。そして、これに対して『グリーンジャ』においても次のような描写がある。「彼らの祖先は、トリエントの司教が主権を握っていた時代にこの地へ移住してきたもので、今もなお彼等は風雨にさらされたドイツの石のように、イタリア人の間に割り込んで暮らしていた。」(P-237) そして、ここの記述にあるトリエントの司教という名前は、先の『ポルトガルの女』の主人公であるケッテン殿の長年の抗争の相手として、「トリエントの司教は勢威ある領候であった」(P-254) として登場しており、二つの物語の関連性を否定することは出来ない。しかし、ここで指摘したいのは、当然の事ながら内容そのものの類似性ということではなく、並べて収録されたこの二編が数百年の時を隔てた、一方は中世、一方は現代を舞台にしているにも拘らず、山や河、谷、空といった事に自然の背景描写において同じ背景を描き出そうとしている事と同時に、しかし、この二編の文体が全く異なっている点である。

二つの物語の背景的な類似性は、先の記述以外にも、以下の記述からも、非常に顕著に読み取られる。

城は荒々しく聳り立っていた。岩の胸板の此処かしこに、いじけた木々が一筋一筋の髪の毛のように根を張っていて、森に覆われた山々は激しく上下に波打ち、海の波しか知らぬものには説明してやりようもない醜悪さであった。冷えた香辛料の匂いは大気に満ち、全体の印象は、見慣れぬ染料を湛えた、大きなひび割れだらけの壺の中 [強調筆者] に馬を乗り入れる感があった。

(P-255)

それは、上部を断崖によって区切られた背の高い山々から成る、半円弧という以上の形をした壁であって、山々は険しく一つの窪地になだれ落ち、窪地は、その真ん中に聳える、周囲の山より低めの、森に覆われた円錐を環状に取り巻いていた。そのため全体はさながら空のクーゲルブッフ⁹⁾ [強調筆者]のような形をした中空の世界であった。この世界の小さな部分は深い溪流によって切り離されていたので、世界はそこでぱっくりと口を開け、高く聳えながら、溪流と同時に谷間へ滑り落ちている対岸へ向かって傾いていた。

(P-236)

上記の引用の前者は、『ポルトガルの女』からの一節で、ポルトガルの女が初めてケッテン殿の生地に踏み入れた時の印象を述べた箇所であり、後者は、『グリージャ』からの一節で、主人公のホモが採掘の下見聞に訪れた土地の様子を述べた箇所である。文体そのものの相異、そして、実際描かれている情景そのものに違いはあるが、舞台とされている土地の光景は、時代は全く異なれど、ほとんど同じ地域の景色を思い浮かべることが出来る。

事実、先に述べたように、この二編のモチーフが第一次大戦中の経験に拠るものであるため、この類似性があるといえる。第一次大戦中、1914年の召集以来、1915年にトリエント、イタリア軍参戦後、パライ（イタリア名で、パルー・ディ・フェルゼナ）に転戦、1916年に重症によりボーツェンの赤十字病院に送られているが、このパライ（フェルゼナ）における経験が『グリージャ』のモチーフとなり、ボーツェンでの実際談である、「ボーツェンの小さな幽霊猫」、「彼岸から来た小さな猫」（TB II-1055-60）が『ポルトガルの女』の大筋のモチーフになっている。この二つを並べて収録したことに、ムージルの何がしかの意図が含まれているように思われる。そして、興味は、やはりその文体の相異に向けられる。

この二編は、設定されている舞台の背景は非常に良く似ているにも拘らず、全く異なった性質の作品である。それは、文体そのものの違いに如実に現れている。ムージル唯一の中世忌憚である『ポルトガルの女』は、物語の文体であり、実際

存在しないものを取り上げ、メルヘン風の幻想的な世界を描き出しているのに対して、『グリージャ』においては、真実の姿を精密に描き出そうという強い要求があり、自然の情景に限らず、全ての対象を可能な限り厳密に再現しようとする、リアリズムという文体に深く結び付いていると考えられる。

『三人の女』の共通した「不実」、「不貞」というテーマ、そして酷似した背景を持つ二作品が、全く異なる要素を持った作品として並べて収録した意図、更に、その厳密な文体に拠って書き上げられた、三篇の冒頭である『グリージャ』について、次に見ていくこととする。

3. 現実との乖離

人生には、先へ進むのを躊躇^{ためら}うように、それとも方向を変えたいというように、目立って進行が遅くなる時期がある。こうした時、不運が人を見舞いがちであると言えるであろう。(P-234)

これは、『グリージャ』の冒頭部分からの引用であるが、原文にして三行程度のこの記述に、小説全体のエッセンスが抽出されている、これは全体を読み通した後、一種のイロニーを以って再び理解される。

『グリージャ』において、主人公のホモ (Homo) は、それまで妻と離れて暮らしたことが無いほどに妻を熱愛してきたのであるが、それが、彼らの間に「息子」が存在するようになって以来、変化するようになる。

今でもこの愛情に変わりは無かった。しかし、子供の存在によってこの愛は分離可能 (強調筆者) なものになっていた。石に水が滴り染み通って、少しずつそれにひびを入らせて行くようなものだった。分離性 (強調筆者) という愛情のこの新しい特性にホモは少なからず驚いたが、それを知ったからと言っていささかも愛の弱まることも無ければ、弱めようと思う気もさらさら無かった。(P-234)

この引用に現れているように、彼が妻を愛していると言うことは、形態は変化しても、この小説を通して変わることがない。しかし、この「分離可能」(P-234) という象徴的な言葉によって、主人公は現実感覚を喪失し始める。彼は、最初自分自身から隔離されることを恐れるが故、家族と転地することをしなかったのであるが、結果として、「分離可能」と言う言葉に導かれるかのように、偶然友誼を結んだ知人からの突然の、そして、内容も信憑性に欠ける様な1通手紙の誘いに応じて、帰ることのない旅に出る。この彼の「旅立ち」、即ち自分自身の所属していた家族、家との離別によって、ホモは現実感覚を喪失し、「可能性感覚」Möglichkeitssinn に支配された非現実性に身を委ねることになる。この、いかにも怪しげな一通の手紙によって誘われた「旅」は、日常からの一時的な離脱、束の間の開放というものではなく、決定的な「別の状態」への移行を意味している。この「非日常」において、彼は、「存在」してはいるのであるが、彼自身にとって、肉体そのものと、内面そのものも全く別個の存在となってしまう。彼は、虚空に漂い、非現実の世界に内面を委ねる存在となる。それ故、彼は、妻からの手紙に、返答することをしないが、彼を愛し、彼が愛する存在が自らにとって、法外な保障であるように感じるということが起こる。これにより、彼は新たな愛の可能性を確信するようになる。

ホモは、家族からの知らせを契機に、「我と我が身が自分の腕から引き離された」(P-240) ように感じ、自分が「誰か別人の肉体によって構成された形態」(P-240) かのようになつたと感じるようになり、自らが戻ることはないことを確信する。即ち、現実の家族の元への帰還のみならず、彼自身との離別をも確信する、つまり、現実世界との離別の可能性を確信するのである。これは、本稿のテーマの「妻との死後における再合一」を予感させる。

この日を、ホモは「永遠の劫初」の日であると感じ、この時を境に、「世の不実の可能性はことごとく霧散」(P-241) し、天上の秘蹟としての「愛」を体験するのである。即ち、現実世界における彼の不貞行為というものは、その可能性そのものを失うのである。逆説的に、彼は、妻との永遠の愛を獲得するために、フェルゼナにおける非現実性に身を委ねた状態での奔放な快楽、そして、グリージャとの関係に身を任せるのである。これは、「愛の完成」にけるクラウディネの行動

と内面に非常に酷似している。

そんな時彼女は、ことによると自分は他の男のものになるかもしれない、と思うことが出来た。しかも、彼女にはそれが不実のように思えず、寧ろ夫との究極の結婚のように思えた。どこやら、二人が音楽のようでしかなくなる、誰にも聞かれず何者にもこだまされぬ音楽に等しくなるところで、成就する究極の結婚のように。(P-165)

ホモにとっては、不実が「婚礼の日々、幾日も続く昇天の日々」(P-249) というように、高まれば高まるほど、「究極の婚姻」(P-165)、その可能性が確信となってくるのである。フェルゼナにおいて、農婦たちと関わり、その中においてホモがグリージャと情事を重ね、その最後の瞬間まで彼の元の、現実感覚に即した存在を喪失しているにも拘らず、情事の相手の夫に「生」そのものへの回帰路を絶たれた瞬間、微かに「教養ある人間として」(P-251) と述べられていることから、この瞬間、彼が現実感覚に引き戻されたことを示しているのであろうか。しかしながら、グリージャに捨てられ、すでに肉体が現実から消滅しようとする刹那に、回帰の可能性を与えられているにも拘らず、敢えて復帰を拒否している。

最終段落において、この主人公であるホモが、自ら回帰への可能性を絶ち、意識を失ったとき、彼を誘った、フェルゼナの金鉞開掘事業の打ち切りが語られ、物語は幕を閉じる。此处で物語を終わらせていることにより、全てが、即ち、妻と息子の転地療養も、彼を開掘事業へと招来した手紙も、事業も、まるでホモを「死」へと誘う為に、巧妙に仕組まれた計画でしかなく、当然のごとくホモはそれに陥れられたかのように、しかし、最終的にホモが自ら生への回帰を拒んでいることに、一片のイロニーと、同時に、永遠の、離れた妻との「死後の再合一」の可能性を予感させる。

4. 『ノート』より

先にも述べたが、『グリージャ』は、対戦中の経験にモチーフを与えられてい

るものであるが、作中のグリージャ、即ち、レーネ・マリア・レンツィのモデルとなった女性も、当時のムージルに実際関わった女性である。モデルとなっているのは、マグダレーナ・マリア・レンツィ(1880-1954)で、パライ駐屯中のムージルの宿舎の向かいに住んでいた。その土地の他の住人と同じようにオーストリア人のポーターであった。小説の素材になった記述は『ノート1』*Heft 1*(1915-1920)に多く含まれている。この『ノート1』には多くの要素がそのままもしくは多少手を加えられて用いられているが、大幅に削除されている箇所も見られる。それは、物語の描写の厳密さを重んじるためか、他の箇所との調和が取れなかったためか、女性たちの様子を述べる際に削除されているようである。その中に、「待っている女たちは、東洋風に膝を立てて、地べたに座っている。肺結核の女は蠟で作った黒髪 of 聖母マリアのように白い。彼女は優しく、どの女とも冗談を言い合う」(TB-304)という部分があるが、決定稿では、この「肺結核の女」の記述は削除されているのである、宗教的な理由もあろうが、このような欠落は他の部分にも見られる。

さて、日記によると、ムージルが『グリージャ』の構想を始めたのは、1918年11月2日⁹⁾であるが、この間に、1914年～16年付近の経験をまとめようと、少しずつ手は加えられていたようである。

『グリージャ』のテーマは、「不実」もしくは「不貞」は当然のことながら、現実感覚の喪失の果ての「死」と、それによって成就する、妻との「究極の結婚」(P-165)、即ち、離れた妻との「死後の再合一」と言えよう。これに関しては、主人公ホモの妻から、彼の所在を知る手紙を受け取ることによって、まさにそれにより彼が、現実からの脱却により、自らの不実の可能性をことごとく霧散させるという部分から読み取ることが出来る。

彼らが今の彼の滞在地を知っているということは、彼には法外な保障のように思われた。[中略筆者] 彼は己の手の内に愛するものの手を感じ、愛するものの声を耳にした。[中略筆者] だが、それにも関わらず、彼がもう帰らないということは確実だった。[中略筆者] 何時終わるとも知れない永遠の第一日だった。世の常の考慮、世の常の倦怠や不実の可能性はことごとく姿

を消していたが、それというのも、]ほんの15分の軽はずみの為に、永遠を犠牲にしようとは誰も思わないのだから、初めて彼は、一切の疑いを免れた天上の秘蹟として、愛を経験した。(P-240f.)

上記の引用は決定稿に拠るものであるが、下地となっている『日記』の記述には、大分異なった記述が見られる。それは、以下に引用する部分である。

このように長期間再開せずにいることが、互いに所属しあっているという事実のこの失効をもたらした。これは後になって屈辱を感じ、最初からやりなおさなければならない破産宣告のようなものだ。僕は、このことを認めた上で、新たに君を獲得しなければならない」(TB-305)

これは、決定稿とは明らかに間逆な内容であるが、此処における「君」とは、「離れた妻」である。『日記』には、グリージャとの情事の記述はないため、ここに、グリージャとの関係を仄めかしているのであろうか。ここの記述に続く部分に、「不実は天上の至福を殺す。それは秘蹟の破壊だ」(TB-306)で締めくくられている。小説における記述とは、単なるニュアンスの違い以上に、実際と感情の相異が認められる。

『合一』以降のテーマである「不貞」、「不実」は、ムージルの妻、マルタ・ムージルのある行為によって、より一層強い意味を持つようになる。『グリージャ』におけるホモの妻の幾分かはモデルとなっているが、マルタは、ムージルとの恋愛中、ムージルを裏切る刺激に駆られて、昔の婚約者であるティン・コーエンと不貞行為を行っている。しかし、これ以降、彼女は彼の最も熱烈な支持者であり、二度と彼を裏切ることは無かったのであるが、この行為が、『合一』のクラウディネの行為に反映し、そして、彼のテーマにより強く影響したことは間違いない。

実際に、『日記Ⅱ』のなかに、「ラーベ(マルタ)は納得できた…不実の最も素晴らしいところは、自分自身の最も微妙な部分が不実の中で現実化して感じられるところだ、と」(TBⅡ-946)という記述もあり、彼女がムージルに与えた影響は大きいものであったと思われる。

『三人の女』においては、男女の立場は反対ではあるが、不実によって愛情に

気付く、即ちそれによって初めて対象を意識するという傾向の見られる『トンカ』も含まれているが、ここに登場する「トンカ」と、『日記』に登場するマグダレーナ、そして、ヘルマ・ディーツ、そしてグリージャには共通点が、即ち、「不実」による愛の認知と成就が顕著に認められると言える。

焦点がずれたが、神秘的な、非現実的なものに最終的な救済を求めるといった手法は、もともとカトリックであったムージルの、カトリック的な要素の反映も少なからず認められる部分である。そして、こういった方法のなかで、ホモが妻との「死後の再合一」の可能性を確信し、「己が生を支配する王者の座に彼を登らせた」(P-241)と述べているのは、異様な感じがするが、しかし、これによって、しかし悲劇的な死によって、しかし、「妻との再合一」を予感させるムージルなりの救済の与え方に、この作品全体に流れるイロニーを再確認させられる。そして、これが、実際のムージルの『日記』における感情の吐露とかなり異なっていることが、より一層、それを強めている。即ち、これこそがムージル自身の、作品内における試みであるとも、言えるのではないだろうか。

註

- 1) 1924年に出版された短編集。1923年に豪華本として200部だけ出版された『ポルトガルの女』と、すでに書かれていた他の二編『グリージャ』、『トンカ』が共に載録されたものである。
- 2) Vgl. Zeller, Romarie: Zur Komposition von Robert Musils "Drei Frauen". In: Beitrage zur Musils-Kritik. Hrsg. Von Gurdrun Brokoph-Mauch. Bern, Frankfurt a.M. (P.Lang) 1983. S.25-48
- 3) Vgl. E.Kaiser/E.Wilkins: Robert Musil. Eine Einführunf in das Werk. S. 108
- 4) クーグルブッフ：ほとんど筒型の、上方に向かってやや窄まり、上面上方に窪みのある、干し葡萄入りのパンケーキ。「空の…」とあることから、この形の型をひっくり返した形をしていると予測される。
- 5) Vgl. TB-341f.

文献

テキスト

使用テキストは以下の通り。引用に関しては、本文中に丸括弧して略記号と頁数を付した。なお、訳出には、種々の翻訳を参考にさせて頂いたが、訳出は筆者の解釈に拠る。

Musil, Robert :

Prosa und Stücke, Kleine Prosa, Aphorismen, Autobiografisches; Essays und Reden; Kritik. Hrsg. von Adolf Frisè. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978 [Pと略記]

Der Mann ohne Eigenschaften. Roman. Hrsg. von Adolf Frisè. Reinbek bei Hamburg. (Rowohlt) 1978 [Mと略記]

Tagebücher. Hrsg. von Adolf Frisè. Reinbek bei Hamburg. (Rowohlt) 1978 [TBと略記]

Tagebücher. Anmerkungen, Anhang, Register. Hrsg. von Adolf Frisè. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1978 [TB IIと略記]

参考

直接の引用以外に、伝記等、参考にした文献を列記させて頂く。

Dinklage, Karl :

Robert Musil. Leden, Werk, Wirkung. Hrsg. von Karl Dinklage. Wien: Amalther-Verlag. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt) 1960

Krottendorfer, Kurt :

Versuchsanordnungen. Die Krise der bürgerlichen Gesellschaft in Robert Musils "Drei Frauen". Hrsg. von Kurt Krottendorfer. Wien; Köln; Weimar: Böhlau Verl. 1995

Großmann, Bernhard :

Robert Musil, Drei Frauen : Interpretation / von Bernhard Großmann. - 1. Aufl. - München : Oldenbourg, 1993 (Oldenbourg-Interpretation; Bd.63)

Corino, Karl :

Robert Musil. Leben und Werk in Bildern und Texten : Rowohlt 1989

(まえだ おりえ ドイツ文学)